

第231回新潟外科集談会

日 時 平成2年12月1日(土)
午後1時
会 場 新潟大学医学部第三講義室

1) 自然脱落した食道顆粒細胞腫の1例

吉田 正弘・斉藤 六温 (刈羽郡総合病院)
関矢 忠愛・植木 光衛 (外科)

今回我々は食道の granular cell tumor (GCT) の自然脱落例の1症例を経験したので報告する。症例は39才女性、昭和59年より食道 polyp の follow up 中、平成1年11月の内視鏡検査で、門歯列より35cmに約8mm径のやや白色調を帯びた山田Ⅲ型の polyp を認めた。生検で胞体の豊かな多型性の腫瘍細胞を認め、胞体内には無数の好酸性顆粒を有し、核は大型で明瞭な核小体を有していた。細胞の配列は敷石状で規則的、S-100蛋白、PAS は陰性であった。以上の所見から GCT と診断された。悪性の可能性を否定できないため下部食道噴門切除術を行った。手術標本では腫瘍は認められず、自然脱落したものと考えられた。術後経過は良好で、現在まで再発はない。

2) 胸部食道癌再建術での頸部食道胃管吻合における PCEEA の有用性について

若桑 隆二・平原 浩幸
佐藤 攻・松田由紀夫 (長岡赤十字病院)
田島 健三・和田 寛治 (外科)

食道癌手術患者の Quality of life には手術侵襲を少しでも軽減し簡単かつ安全に再建することが重要と思われる。我々は胸部食道癌切除後の再建臓器としては、大彎側胃管を第一選択とし GIA や PCEEA を使用し手術手技の簡素化と時間短縮を計ってきた。GIA により幅4cm、長さ約35cm以上の長い大彎側胃管を短時間に作成し、PCEEA の使用により食道胃管吻合が頸部だけの操作で再建経路の如何を問わず可能になることが特徴である。当科の食道癌症例につき自動吻合器の使用上の工夫とその成績につき報告する。

過去1年間の胸部食道癌症例は21例であり、PCEEA により頸部食道胃管吻合がなされたものは17例である。再建経路は胸骨後11例、後縦隔6例で端々吻合が7例、端側吻合が10例である。合併症として縫合不全3例、吻合部狭窄1例を認め、縫合不全はいずれも端側吻合例の

minor leakage で約1週間の禁食で軽快した。狭窄は端々吻合例であり食道ブジーにて治癒した。今後も症例を重ね検討したい。

3) 新潟市の消化性潰瘍に対する外科治療の実態

親松 学・中村 茂樹
佐藤 賢治・松尾 仁之
田宮 洋一・松原 要一
武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

我々新潟市内の消化性潰瘍手術症例数を集計し、その変遷を検討したので報告する。

【対象および方法】1976年から1989年までの14年間に新潟市内17施設で手術が施行された消化性潰瘍2,135症例を対象とした。1982年のH₂ ブロッカーの発売前を前期、それ以降を後期として平均年間手術件数を比較した。

【結果】難治性潰瘍例は前期に比べ後期では158例/年から45例/年と28%に減少していた。出血例は前期20例/年、後期17例/年で85%に減少していた。この減少は1985年以降にみられ、内視鏡的止血術の普及によるものと思われた。穿孔例は前期34例/年、後期35例/年で変化がみられなかった。しかし、一昨年、昨年と症例数は減少傾向にあり、今後の推移が注目される。

4) 大網充填術後に胃潰瘍の再穿孔を来たした1症例

福田 喜一・川口 英弘 (巻町国民健康保険病院外科)

(症例) 37歳男性。胃潰瘍にて内服治療の既往有り。胃前庭部前壁の穿孔にて緊急開腹術を施行した。耐術性に問題はなかったが、比較的若年の独身男性であり胃切除後の後遺症など今後の Quality of Life も考慮して、大網充填術を選択した。第18病日の胃内視鏡検査では、穿孔部は再生上皮に被覆され H2 stage にまで回復していた。H2 ブロッカー等の抗潰瘍剤を服用していたが、術後16週目に再穿孔を来たしたため広範囲胃切除術を施行した。

(考案) 大網充填術後の再穿孔例を経験したことにより、以下の事柄に関して再検討を要すると考えられた。

1. 大網充填術の適応
2. 胃切除術や迷切術などの2次手術の必要性の有無